

第16回 日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in 高知 (抄録)

管理番号	B 8	登録番号	89	発表番号	
発表形式	ポスター発表	演題分類	活動報告・運営システム		
筆頭演者	日野上 貴也		筆頭演者所属機関	アクティブ訪問看護ステーション松原	
共同演者					
所属機関追加					
演題名	夫の免許返納に伴い電車での通院が必要となった症例の通院練習を通して～心意気実践チームの活動紹介～				

抄録本文：

【はじめに】

本症例はうつ病により2年間の臥床生活であったが、薬剤変更によりADLが全介助レベルから自立となった。その後、歩行の実用性向上を目的に訪問看護ステーションからの療法士等(以下訪看 I 5)を開始。開始後より夫の高齢化により免許返納を考えており通院を一人で行う必要があると相談を受ける。しかし、業務が訪看 I 5で構成されているため時間を要する評価が困難であった。そのため担当者の支援範囲では困難な事例に対し柔軟な対応が可能である心意気実践チームが対応を行った。

今回、訪看 I 5スタッフと心意気実践チームが連携し、一人での通院を支援した経過について報告する。

【心意気実践チーム】

訪問リハや通所介護の活動、参加、自立生活支援のサポートチーム。OT 4 名が在籍し訪問業務を週 3 日、サポート業務を週 2 日実施。

【症例情報】

一般情報：80代、女性、要介護2、夫と2人暮らし、約2年間一人での通院なし

既往歴：乳がん、うつ病、変形性膝関節症

療法士評価:TUG:13.7秒,10m歩行:12.1秒,片足立位:右3左2(片手支持:右30左10秒),握力:右13.1左14.9, FAI : 20/45,LSA:56点,HDS-R : 30/30,把持型歩行車を利用し20cmの段差昇降可能,屋外歩行30分可能

通院場所：公共交通機関を利用し片道40分程度

【目的】

- ・公共交通機関を利用しての通院評価
- ・課題を訪看 I 5スタッフと共有し自立支援を促す

【方法】

訪看 I 5スタッフで療法士評価を行い、心意気実践チームで訪看 I 5を80分利用し通院評価。時間超過分は無報酬で実施①公共交通機関の利用方法の確認②歩行の実用性確認③評価結果を訪看 I 5スタッフに報告

【結果】

心意気実践チームの通院評価結果①切符を直した場所を忘れるため声掛けが必要。その他の動作は可能②電車乗降時に把持型歩行車を前方にリーチするとふらつきが見られ介助が必要。道順の間違いが見られ声掛けが必要③評価を訪看 I 5スタッフに報告。評価結果を受けて目標が「歩行の実用性向上、両下肢の筋力強化」から「通院の自立、把持型歩行車を持ち上げて前方にリーチできる、切符を直す場所を決める」に変更された。

【考察】

今回、訪看 I 5スタッフの評価では一人での通院が可能と思われていたが、通院評価を行うと切符管理の拙劣さや電車乗降時のふらつき、道順間違いといった課題がみられた。このことから、療法士による評価と付き添い支援を行うことで目標設定と治療内容の再検討を行う事ができ、自立支援ができると思う。

【まとめ】

通院自立に向けて訪看 I 5スタッフと心意気実践チームで支援を行うことで自立支援に資する目標設定ができた。今後、通院支援は老計第10号で区分されている訪問介護の見守りの援助でも可能なためサービス移行も考える。

【倫理的配慮，説明と同意】

本発表に対して対象者に口頭と書面にて説明し同意を得た。